

高厦築來避俗塵。入門三百四方身。道窮今古而時習。學遍東西又日新。白水競舟明月晚。
蘇山狩兔朔風晨。堪歡九國科場毅。欲墮英雄幾許人。

梧園先生曰。前聯語有來歷。

八代行軍紀行一節

今年もはや四月なかばをすぎぬ、長閑なる春深く、霞みわたして、藤のたつ浪さちかへり、八丈の絹わりなせる菜の花は、咲き亂をたる蓮華草も色どらき、遠き野末より、雲雀の二羽、三羽、まひ上るさま、めもあやなり、いでや、この時をすこさず、日ごるのやるなきうさ晴さんと、八代あたりへ、行軍することゝなりぬ、

二十一日 午前七時ばうりよ、喇叭を吹きならしつ、いといさましく門出す、わをわし生徒の数は、二百人に餘りぬべし、やがて水前寺に着きぬ、しばし木蔭にいて立ち出つ、此日しも、空よくはれたれば、あつきことかぎりなく、ちりさへ飛ひちがいて、いとうるさし、からく去て、正午と覺しき頃、御船の町につきぬ、とある寺をうりて、背囊などおろしつ、晝げたうべ、友垣一人二人とらあたりを散歩す、この地と去ぬる十とせ西南の役に、いとばげしき、戦ありしとあるときゝぬれど、はやるの跡

もなく、寺の片ほとりに名ごりばがりの石碑のみぞ立ちたる、表に丁丑戦死之墓としるし、池邊吉十郎氏モ、つらなり玉へり、歲月あまふへぬれば、昔のむすべるのみ、香華のうなへすらなければ、甞ふ人も絶てなきにや、午後二時ごろ、寺を出で、高等小學より立ちより、やがて山路にうよりぬ、車さへ通はぬさかなれば、足は心にうい難かり、よふく下り坂となりぬ、見渡せば、青き柳の緑川は、已か色を四方の山々にうちつづかせ、どゝるく早瀬の音、かすかにきこえて面白し、早川村には、むかし誰か籠里にし、城趾ありとき々ど、うすみにかくれて、見ぬわかず、いと口惜し、まだはやけれど、午後三時ばかりに、甲佐の町にやど里ぬ、夕げもすでにすぬれば、松井氏といふ人のうちに、年久しく飼ひ玉へる鶴ありとき、友どちとうちつれて、氏のまが稀代のきに入里見れば、丹鳥五羽優々とあそび居たり、老たるも今年三十二才ときこぬし、仙鳥とていとめづらし、やがて旅宿にかへ里うちとけあそぶ、夜もまがら水車の音すさましくなれぬたびなれば、いといふせし。

悼春山象雄君文

安住時太郎

彼蒼者天。天果有靈乎。吾不得而知之也。彼茫者天。天果無靈乎。吾不得而知之也。無靈焉。